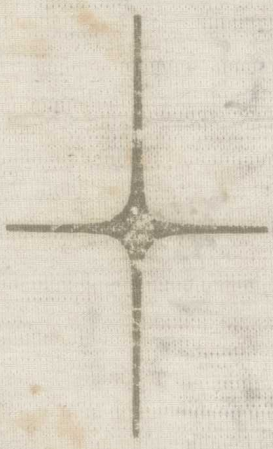

もし落丁、乱丁その他不良品がありましたら、おとりかえ
します。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

10冊の本 7

旅のこころ

定価 五五〇円

昭和四十四年三月五日 発行

編者 井上靖
臼井吉見

発行者 石川数雄

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台一の六
郵便番号一〇一
振替 東京一八〇番
電話 東京(294)一一一一(大代表)

© 主婦の友社 1969 Printed in Japan

10冊の本 7

旅のこころ

旅のこころ／目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山・川・湖

たった一人の山　浦松佐美太郎…9
若き日の山　串田孫一…63
たてしなの歌　尾崎喜八…107

川の話　井上靖…141
笛吹川を溯る　田部重治…155

グダリ沼　井伏鱒二…175

海辺・高原

陸中海岸の明暗　吉村昭…195
足摺岬にて　上林暁…213
信濃路　堀辰雄…255

木枯紀行　若山牧水…285
恐山から薬研渓流へ　加藤蕙…311

自然と人

花の寺　岡部伊都子…327
太古の国の遍路から　金田一京助…353
牧水のふるさと　野田宇太郎…375
〔短歌〕磯の光／中村憲吉7　秋山ゆけば／生方たつゑ106
〔俳句〕谷の梅／古賀晨生ほか60　郷家／中村草田男284
〔詩〕乳母車・雪／三好達治104　きつねにつままれた町／田中冬二174　暮れゆく空へ／柳沢健194　そういう笑いは僕には困る／高見順251　菫／国木田独歩384
〔グラフ〕アルプスへの道／児島善三郎1　近江八景／今村紫紅139
炎路島遠望／藤島武二253

解説

旅情・旅情・旅情　井上靖…385

磯の光／中村憲吉

身はすでに私ならずとおもひつつ涙おちたりまさに愛しく

わたつ海の後の岩のかげにして妻に言らせる母のこゑすも

岩かげのひかる潮より風は吹き幽かに聞けば新妻のこゑ

来しかたの悔しさ思へば昼磯になみだ流れて居たりけるかも

おぎろなき息をもらせり内の海八十島かげに水のひかれば

中村憲吉（明治二十二～昭和九年（一八八九～一九三四））歌人。広島県生まれ。七高をへて東大経済科卒。四十二年より『アララギ』同人として、しだいに中心的歌人の一人となった。歌集に「軽雷集」ほかがある。「磯の光」は、歌集「林泉集」に収められた連作（三十四首あるが、ここには十首を抄録）で、母と新妻を伴って鞆の浦に遊んだ作者の哀歓がみなぎり、憲吉の代表作の一つとされている。

光るうみの珠拾ひつつ磯かげの山かた付きて行かす
母かも

磯を行くひまだに母はあはれなり我が新妻を愛しみ
たまへり

おほけなく涙おちたり生ありてあり磯の珠も母と拾
へば

たまさかに歓ぶわれと思へかも昼磯のうへに涙とど
めざらむ

はしけやし母と妻とがむつぶ浜珠ひろふ間を岩がく
り来ぬ

たった一人の山

浦松佐美太郎

浦松佐美太郎〔明治三十四年(一九〇一)〜〕評論家。東京生まれ。東京商大(現一橋大)卒業後、ロンドンに留学、四夏三冬をアルプスの山々を求めて過ごした。帰国後、『改造』『中央公論』『文藝春秋』ほかに書いた登山記をまとめ、昭和三十三年「たった一人の山」を刊行、わが国山岳文学の最もすぐれた作品の一つとして評価されている。

この「たった一人の山」は、前記の書から数編を抄録したものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たった一人の山

山登りか好きだなとというのも、考えてみるとおかしなことである。

夏の大空に、もくもくとのし上がってゆく入道雲を見ていると、痛切に山が思われる。夏の山と入道雲とか関連していることもあろうし、また入道雲か空高く真っ白に輝いているのか高い峰を思わせることもあろうが、しかし、私か入道雲をなかめて一番切実に山を感しるのは、あのくいくいと空へ伸び上がってゆく勢いである。手と足で、それだけを頼りに、はるかの山へ登ろうという、山へ登る時の心意気を、実に素朴に表現しているからである。

静まり返ったコンサートホールの中で、音か音の上に積み重なるように、急速なテンポて限りもなく高く高く盛り上がってゆく、華麗壮大な交響曲などに耳を傾けていると、いつの間にやら、たった一人で山登りに思い耽っている自分を、見いだすことがある。そうかと思うと、淋い弦楽四重奏曲の短い一節に、どこかの山の、岩をよじていた時の気持ちを、急に思い起こさせられるようなこともある。演奏会が終わって、どやどやと出てゆく人混みの中で音楽のことなど忘れてしまって、山登りの素晴らしさに興奮しているのだからおかしなものである。

もっとおかしなのは、電車の中に腰掛けていて、突然に、岩角からずるりと滑った時の気持ちを思い出した時である。思い出しただけで、指の節々や足の裏か、むずむずする。指や足の神経に、怖かった記憶が、しみのようになって残っているのかもしれない。

日常の生活のおりふしに思い出される山登りは、ただ単に山へ登ったという記憶ではなく、山登りの持つ味である。

だから山の写真を見ても、いい山だとか、きれいな山だとか感じる前に、こいつを登ったら面白い山登りか出来そうかとうかと考える。ながめて素晴らしい山で、登ってみて少しも面白くない山がある。登って面白い山は、また別である。岩の面白い山がある。氷の面白い山がある。岩も氷も、どこが面白いとは言えないが、全体として独特の味のある山がある。一度でたくさんだと思う山もあるし、二度でも三度でも登ってみたいと思う山もある。山登りの味わいは一様てはない。

そして味わいである以上、これをかみ分ける力が、大きくなればなるだけ、味わいも深くなってくる。この味わいの上から言えは、八千メートルを越えるヒマラヤの山登りは、大まかな味わいのものであろう。もし細かな味わいのするものであるとしたら、八千メートルを越える頂まで到底登り着けはしまい。その点では、四千メートルのアルプスの山々には、細かく深い味わいのものかたくさんにある。

この味わいをかみ分ける力と言ったが、これはむずかしく言えば、登山の技術である。しかし登山の技術は、たとえてみれば定石のようなものである。相手が、定石とおりにやってくれば文句はないか、山は決して定石とおりにはやってこない。岩の性質や状態が実に千変万化である。氷や雪も、決して好都合な状態にばかりはいない。その上に、天候が、気まぐれな、目にもとまらないいたずらをする。こんなに様々に変わる相手を向こうに回して、間違いなく駒を

を進めてゆくとすれば、登山もなかなかむずかしい芸である。

一つの芸は、足を踏みこんでみれば、やかて楽しみよりも苦しみの方か大きくなってくる。しかしこの呂しみを苦しんでゆくところに、また楽しみがあると言えるかもしれない。この修業の期間はずいぶん長くかかり、しかも山登りでは体力が大事な要素をなしているので、これを突き抜けて次の境地へ進むのはなかなかむずかしいことである。

一つの山を登り終えて、さて振り返ってみて、実に胸のすくような、すっきりした山登りだったと思えるくらいの登山をやってみたい、こんなことを、考えるようになった時が修業の始まりである。私は、モンブランの周りの山々を登っている時分に、ちょうどこんな時期に落ちこんでいた。

急峻な断崖に、やっと足の踏めるくらいの道筋か、削り取ってある。山小屋から氷河へゆく崖道である。夜明けにはまだ遠い朝の三時ごろ、カンテラの蠟燭の明りに足もとを照らしながら、この道を歩いてゆくのである。石楠花の根かところどころに出っ張っている。風が冷たいので、片手は小脇に氷斧をはさんだまま、ズボンのポケットに突っこみ、片手にはカンテラをぶらさげている。頭の中は、まだ眠っているような、さめているような、実に変な調子である。こんな風にしながら、私は、この崖道を何べんも通った。そしていつでも、今日こそは、見事なすっきりとした山登りを、仕上げてやろう、そう思いながら歩いていたのであった。崖の下はるかの谷底には、シャモニーの町の灯が、ばらまいたようにきらきらと光っていた。

だが、山を登り終えて、夕方同じ道を、山小屋へと帰ってゆくときは、いつも滅入りこんで

いるのだった。あすこの岩は、あんな登り方をするんではなかったとか、なぜあんな所で靴に岩を引っ掛けて落としてしまったのだとか、癪にさわることばかりが、思い返されて仕方がなかった。

そのあくる年の夏の初めには、ウェノターホルン西山稜の初登攀をやり、秋にはチロルで山登りを終え、アルプスに別れを告げて、日本へ帰ったのであったが、その夏の終わりのことである。

観光客相手の大きなホテルが、店をしめる夏の季節の終わりに近く、私はグリンデルワルトの谷で退屈な数日を送っていた。夏の初めに一緒に山を歩いていたザミは、陸軍少尉として演習に召集されてしまい、それから後で、南のワリスの山々を一緒に登って歩いたエミールも、家の仕事を片つけなければならないので、一週間ほと暇をくれと言って家へ帰ってしまっていた。それも、ホテルの主人として、ひと夏の決算をするためだとあれば致し方かない。気の合った二人の山案内を取られてしまい、そうかと言って、他の気心の知れない山案内と歩く気にもなれないので、たった一人で、グリンデルワルトに帰って来て、エミールの決算のすむのを待っていた。

谷の中腹に作られた菓子屋のいすに腰掛けて、茶をすすりながら、谷向こうの大きな山々の雪をながめていた。季節の盛りならば、散歩帰りの客でにぎわう店なのだが、季節も終わりに近い今は、置いてある菓子の数も少なく、客も私のほかには誰もいない。それでも顔なじみの楽士たちは、楽士たちといっても四人きりしかいないのだが、私のために四重奏を始めてくれ

た。この連中も、もう十日もたてば、山を下って故郷のイタリアへ帰るのだ。それから海を渡って、エジプトのカイロあたりまで稼ぎにゆくのもいるのだ。そう言えば、私がワリスからこのグリンデルワルトへ帰って来る途中では、もっと早く山をしまった旅稼ぎの楽士たちが、同じ汽車に乗り合わしていた。同じように、山で稼いで里へ帰るホテルの女中たちも、一緒に乗っていた。ひと夏、同じ避暑地で働いた同士は、ただ顔見知りというだけなのに、山を離れてゆく汽車の中ではまるで同じ村の若い者同士といった様子だ。その上に、忙しかった夏が終わり、給金をもらって家へ帰るこの連中にとっては、夏の終わりは、楽しい休暇が来たように、心も浮き浮きするのであろう。汽車かトンネルに入るたびに、女たちが悲鳴をあげるような騒ぎ方であった。

山の避暑地の、夏の終わりは、あわただしく寂しいものである。大きなホテルが、一つ一つ窓を閉ざし、大勢の雇い人たちが、山を下ってゆく。電車が谷を登って来るたびに、停車場へ迎えに出たホテルの自動車や馬車も、一台も姿を見せなくなる。村の通りに並ぶ土産物を売る店も、ぽつりぽつりと店いっぱいを雨戸で閉ざしてしまうのがふえてくる。やがては戸のあいているのは、村の人相手の日用品を売る店だけとなる。登山者を泊めるようなホテルでも、食堂へ顔を見せる客の数が少なくなり、大きな食堂をしめて、小さな食堂を使うようになる。晩飯の時には、暖炉に薪がたかれるようになり、月の光はきわだってさえてくる。季節の終わりは、落ちつかない寂しさを感じさせる。

菓子屋の店先で、茶をすすりながらも、その寂しさが感じられる。谷向こうの山の中腹あた

りに見える木の葉は、もう色か変わりかけている。山の雪も、これからは、積もるばかりでとけることがないのだ。登山の季節も、もうほとんど終わりに近いのだ。そう思うと、じっとしてはいられないような、あわただしさが感じられてくる。エミールが暇になるまで、どこかの山へ一人で登ってこよう。楽士たちに、お別れの酒手を与えて外へ出た。ウェノターホルンには、夕日が、真っ赤に当たっている。頂上の雪までが真っ赤だ。

ホテルへ帰る道々、あしたの山は、ウェッターホルンだと決めてしまった。山へ入るのだとなると、さすがに気が晴れ晴れしてくる。山へ一人で行くなどと言おうものなら、宿の主婦や娘か、なんだかんだとうるさく言うに違いないし、それに、あしたはとうせ山小屋泊まりなのだから、朝早く出発する必要もないので、その日は黙って寝てしまった。

あくる朝は、すっかり山へ行く支度を整え、登山靴で、ごとりごとり階段を音させながら下の食堂へ降りて行った。朝飯を食べながら、山の小屋では、一人で何を料理して食べようかと、好きな物を並べて考えた。飯を終わってから、台所へ入りこんで、宿の娘をそそのかし、ぜいたくな食料を一包み徴発してきた。これをルックサックへ詰めこめば、それでもう準備は完了したのである。一人で登る山にはロープがいらないのだから、荷物はずいぶん楽である。どこへ行くのだと言う宿の人たちの質問には、ちょっと一晩泊まりで遠足にゆくのだと答えようと思ったのたが、氷斧をかかえて出掛けるのでは、そんなごまかしもきかないので、近くの山小屋まで一晩泊まりで遊びに行ってくると言って飛び出した。

山小屋までの第一日の行程は、いつでものんびりと楽しいものである。雪崩とか落石とかの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com